

# 文學史論議【一】

田中 裕  
森 修

文學史論議は一昨年の十月三日、最初の文學史研究会がもたれてから毎月活潑に続けられた。これまで文學史について漠然と抱いていた意見も論議を重ねるにつれて明瞭になつてきたことが多い。私達が自由に大膽に自己の見解を発表し、同時にそれが無責任な思いつきに終らぬようにするためには、このような共同討議が最良の方法であることを深く体得するに至つた。從來の日本文学研究においては文献學上の調査を協力することはあつても、一方において共同討議の方法が十分でなかつたために、研究はむしろ個人的に孤立し、全体のなかにたかまつて行くという点が乏しかつたようにおもふ。それでは健全な日本文学研究の發展は望みえぬであらう。文學史研究会はこの点を反省し、共同討議の方法を強力におしすすめることに努力した。勿論それを円滑にすすめてゆくためには共通の地盤がなければならぬ。そのばあいには

日本文學史を研究するという對象は同じであつても、それを取り扱う理論的訓練に乏しい私達は、まずその方法の上に共通した基礎を見いだして行くことが必要であつた。その途は遠く、しかもその走みは遅く、討議を重ねながら日も傾いて時の短きを歎くこともしばしばであつた。しかしそのなかから文學史研究という大きな學問全体として共通した問題が意識されてきたのである。共同討議は文學史研究会を特徴づける第一の根本的な方法である。私達は今後これを日本文学研究の新しい行き方として一そう強力に推進して行きたいとおもふ。

そこでこのような研究を積み重ねて行く爲には、その議論を記録し、整理しておくことが必要になつてくる。整理された論議からはまた新しい意見が出てくるであらう。それ故論議をまとめて会誌に連載し、今後それによつて研究を一步步つ向上して行くことに努力しよう。今回はとりあえず文學史研究第一号發行後の論議に限つたが、それ以前のものも次号には掲載する予定でいる。

第一号の批評は昨年、数回の研究会を重ねて慎重に討議した結果をまとめてみたものである。ちようど夏休み



の爲に旅行したり、帰省したりする会員もあつたが、夏の暑さを忘れて意見を交換するうちに日も移つて秋となつた。執筆会員もこれを批評する会員も論議を重ねるにつれて、これ迄気づかずにきた自己の安易さを認識し、同時に、從來の日本文学研究の限界につき当り、いよいよ文学史研究に關する共同討議の必要を痛感するに至つた。論議は各自説を守りながら、時には緊張し、時には諧謔をもまじえて何時も活潑にすすめられた。記録はそれらを要約したものであるが、しかし論理の正確さを期する爲に、後から發言者に質して訂正した部分もあり、その場合の思いつきに類する言葉などは可なり取捨せられてゐることとおもう。その意味では速記のように会話の姿をそのままに再現したものではない。けれども研究会の雰囲気はなるべく伝えるようにしたつもりである。勿論、論議のうえの放言は面白いもので、それを省いたり、補正したりしたことは却つて論議そのものを固くした感もないではないが、最初の試みとして中途半端なまゝとまりになつたことは仕方がないとして、今後の論議上の捨て石ともなれば有難いとおもう。この論議は大體、

以上のような方針、手つづきによつてまとめられたものであるが、その結果、批評に對する各筆者の應答あるいは再批評といふべきものの記録が簡略になつた、もうすこし詳細に伝える必要があつたかともおもうし、讀者にもまた各筆者にもその点異見はあるかもしれない。次回は更に適切を期したいとおもつてゐる。以下順を追うて各論文別にその論議をかかげることにする。

#### 美意識發展の歴史と文学史 犬塚 旦

七月三十一日、一三、三〇—一七、〇〇、樂友會館。

出席者：森、榎、犬塚、終、明石、神澤、田中、奥村、

源、阪倉

森 犬塚君の論文では、まず題目と内容とのずれが氣になる。かりに名付けるとすれば「文学史研究における言葉の問題」とでもする方がよい。文学史研究における美的言語の追究の意味、ということ論じていると思うが一般論に終つた感がある。

田中 問題を正面から根本的に取扱おうとする態度はよいが、あまり論陣をひろげすぎて形式的な思考や砂述が



多すぎる。

阪倉 一般的にかくかくであるべきだ、というそのことは、いずれも尤もであるが、具体的な方法、手順を問題にしてほしかった。

森 この論文では、まず文学と美意識の関係ということの吟味が欠けている。文学史研究は美意識の追求に終るものではないと思うが、そのような根本問題を考えずに、いきなり美意識追求が考えられている。同時にまた一方では文学が言語を媒材とするという所から簡単に言葉を手がかりとして、それが明らめられると説いている。

(三頁一行) しかし文学が美意識の追求のみにとどまるものでもなく、文学の特色は言葉を手がかりとして理會し易い通路があるというような形式的な問題にとどまるものでもないと思う。言葉の表現という場合にもそれは讀者を慰め、言いさかし、考えさせる所の娛樂、教訓、思想等という内容の根本問題から考えてゆかねばその特質をつかむことは不可能であろう。その場合に形式論が多く、具体論に乏しい感じである。

田中 この論文は、今まで大塚君の手がけてきた「美的

語彙」の歴史的研究の仕事を文学史の一方向きとして理論づけてみようとする試みだと思う。そのために美的語彙を美意識の問題にかえし、美意識を更に、文学とは言語を媒材とする芸術であるという大前提にかえし、基礎づけようとするのであるが、それらの二つの間で思考が飛躍している。(二頁から三頁にかけて、及び三頁十六行の前あたり) 限られた枚数だし、論文の構成の仕方をもつと工夫すべきであろう。

森 この論で美的言語の追求をしたいという意見はよく解る。しかし何故に美的言語の追求がなされねばならぬか、またそれは文学史研究の中でどのような位置を占めるかということを他の研究分野との関係から具体的に示してほしかった。文学が人間の生き方の具体追求の姿であるとする、それが各方面にさまざまな姿をとつてあらわれる中で、何が人生の最も深奥にふれるものであるかを徹底的に考えてみる必要がある。それは時代により社会により異なるであろうが、常に人間の生き方に切実な問題であつたにちがいない。美的追求もそのような問題から具体的に考えるべきであろう。それは「芸術的形



成によつて、美的性格を帯びる」(二頁三行)とか、文学が「言語を媒材とする芸術」で「美的世界の真相」を「具現する」(同頁十七行)という定義のような一般論では解決されぬと思う。

田中 四頁十五行の「ことばのかたちをとつた存在を明らかにし、漸次ことばのかたちをとらないでしまつたものへと検討の歩みをすすめるべきであろう」というところであるが、言葉の形をとらないものへ進んでゆくとはどういうことか。それは例えば、源氏物語中の一節において、そこに一つも「あはれ」の語が使つてなくても、「あはれ」が感じられるという場合に、その「あはれ」の美意識を探らねばならないという事かと思うが、そうになると客観的存在としての文章(一般に作品)そのものもつ美の追求と犬塚君のいわゆる美意識の追求とは具体的にどちらがつてくるのか。この論文でいう美意識は作家個人の意識をさすようであるが、そうすると作品にあらわれている作家の美意識や心理の研究と客体化された作品そのものもつ美の研究との関係、区別を鮮明にしなければ、ここのは問題ははつきりしないと思う。こ

こでいう美意識とは何か、もうすこし詳しく聞きたい。

明石 美意識という語の影像には「小説神髓」に端を發し、「文学界」に繼がれた文学と美とのつながりが考えられ、誤解を招くおそれがある。個人的に意味を限定しての使用よりも、最も普遍化している意味に従つて用いることが大切ではないか。

犬塚 そういう明治期における語の影像を考える方がむしろ特殊ではなからうか。

源 文字が芸術である以上、その本質を考えることはなる程正しい。しかし文学の本質は美である、といった時の美は非常に本質的、形而上的に言われている筈である。従つて犬塚さんのように、文学の本質は美にあるから、その美に對する意識即ち美意識を文学作品の上に探る、その展開を見るというのは少し美の内容の考え方が直接的、表面的すぎるのではないか。むしろ、文学の本質は美なりという意味の美は、單に美意識というようなものでなくて、より廣く、より本質的にその文学作品全体をあらしめているものではないか。だとすると文学作品に實際にあらわれている美的徴標語を探し出してみて



も、それは、古來、日本語では美をさのような語を用いて表現していたかという問題になつてしまつて、直に文學の本質、文芸性の根源としての美の実体を明らかにすることにはならないのではないか。

阪倉 美的語彙ということばの用法は不適當で、語彙でもいうべきではないか。次に文學を考へる場合に、何故特に美的語彙をとり出して考へねばならないのか。例えば助詞、助動詞というようなものにも文學性は反映しているということになるのではなからうか。むずかしいことになると思はれるが。

森 美的語彙であるか、そうでないかは何によつて決めるのか。それを「一應美的と推測されることばに手がかりを求めて」(五頁十六行)「『ものあはれ』とか『幽立』とか『さび』とかいつたことば」(四頁五行)から研究をすゝめることは操作の手續としてはよいが、根本的には美の既成概念に捉はれる恐れがある。又「美は何ぞや」という問題」(五頁十三行)からは具体的規準を立てにくいであらう。そのような一般の問題と具体的操作についてとつと突込んでほしい。

宗政 美意識を探索するのに何故「ことば」といふ葉のみにたよらねばならないのか解らぬ。他の芸術遺産その他社會のもろもろの存在において把握するという方法はいけなひのだらうか。なる程美意識が変れば文芸も変るけれども、それは因果關係として基本的なものであらうか。上部構造を上部構造によつて求めているのである説明、言葉の言い換えに終らなければ幸いである。

犬塚 美意識が言葉以外のものからも考察されねばならないことは書いておいた筈である。(四頁八行、七頁六行)下部構造も十分考慮すべきであるが、それを文學の具体的様相とどう結びつけるかが重要な問題であらう。

森 犬塚君は平安朝時代を中心に考へているためであらうが、現代文學の課題はむしろ美より眞、眞実にあると思う。それは生活態度の問題である。例えば平安朝時代は美的生活が權威をもつていたが、現在そのような關心は薄れている。人間らしい眞実の生き方、眞実の生活、こういうことが現在一番重要になつてくる。

犬塚 ある時代は聖、ある時代は善、ある時代は眞というように傾向性はちがうだらうが、それは素材上のこと



で、その限りではそれらは宗教書、あるいは論理書、あるいは哲学、學術書に所屬せしめるべきで、それらが文學と言いうるためにはそれらに更に何かが加わらねばならぬ。その何かをいま一往、美と言つておくのである。

田中 少くとも現代文學が眞實を重要な關心としている以上、美意識の追求ということは、只今の文學研究の態度、方法としては問題意識が弱いように思う。なる程現代文學にも美はあるだろうが、現代文學の核心、存在理由でも言うべきものが筆者のいわゆる美意識の追求によつて突けるかどうかというところに、疑問はあり、そこに今の場合の問題の要点もあるだろう。

犬塚 問題意識として弱いとは思わない。

源 文芸作品の本質として美を考えるのはよい。しかし美は様々の人間の生をその内容として成立するものであるから、それは、美をあらわすことを手がかりとして抽出することによつて把握されるのではなく、むしろ作品全体から考えなければならぬのではなからうか。

榎 美では近代文學的な眞を理會することが困難であるとするれば、文學とはどういうものであるかについて、

もうすこし根本にさかのぼつて考え、研究会としての意見をまぎめておく必要もあるように思う。それが犬塚君に對する批評としても親切なのではないか。

森 たしかに基礎的な理論の勉強が必要で、その共同研究の方法を考えよう。同時にわれわれの論文をもう少し具体的な方向に深めてゆかねばなるまい。

## 文學史と言語史 奥村恒哉

八月十一日、一四〇〇—一九〇〇、森宅。出席者—終、

明石、源、小久保、榎、奥村、田中、阪倉、神澤、森

阪倉 始めに原理的に書いてある事が、以下の叙述に説明されれていない。枚数の少いせいかもしれないが。

森 結局しりきれとんぼになつた。引用文の揚足とももこれる感がある。もつと取扱う問題、叙述を限定して焦点を明瞭にしてほしい。

田中 言文一致運動を「國語史的事件」(十頁三行)と前提して中村氏の批評をしているが、この方が却つて國語學的偏見で、むしろ「大きな(精神)現象の一面」(九頁十一行)として考察すべき性質のものであろう。



阪倉 中村氏の文章はよく読んでいないが、よく読めば奥村君の誤解ということになりはしないか。

森 「人間が作ったものだから歴史は成立している筈だ」と考える。自明のこととして扱つてよいと思う」(一〇頁一三行)とあるが、果して自明の事であろうか。文學史の場合も人間が作った故、自明の事といえるのか。神澤 人間は存在である。生きた存在は歴史を形作るという論理を前提としているのであるから、ここの文章はこれで解るのではないか。

奥村 国語史は歴史的視点をもつて眺められるかという時枝、亀井、大野氏らの論議を自分流に理會したつもりであるが。

阪倉 類推を變化の原因(一二頁三行)といつてゐるが、それは變化の様式であつて原因ではない。類推が歴史にならないというのも言いすぎであらう。

田中 言文一致運動の歴史を「多情多恨」で閉じる(一二頁七行)というところは解らない。中村氏の説を否定する理由をもつと詳しく聞きたいと思う。後の方(一五頁十三行)で和漢混淆文の歴史の場合は院政・鎌倉期で閉じ

ずに現在にまで及ばねばならないとしているが、そこそここれは考える態度に矛盾はないのか。

阪倉 一二頁一一行の意味が解らない。大上段にふりかぶりすぎている感じがある。言語の論理化ということばにも問題がある。

田中 論理化ばかりでなく、感情表現の方向にも更に豊富に刻まれてゆくという事がなければならぬだろう。

森 言文一致運動という具体的事實に對する解釈からそのまま一般論が引き出されている感がある。例えば言文一致運動は當時の人々の意図なり欲望なりが實體化したものでなく、甚だ朦朧としたものであつたという所から大野氏の欲望説に對して批判が下されている。(一二頁一三頁)しかし奥村君が言文一致運動について考えた欲望の見解と大野氏の欲望説には、具体的解釈と一般論という立場の相違による意味のずれがあるのではないか。それを無造作に結びつけたような嫌いがある。

田中 欲望説をここに引かれている限りで推定すれば、国語史についてはともかく、文學史の理論としては素朴であらう。それにしても一般に歴史を動かす要因として



そういうものを考えようとする態度は理會できる。しかし奥村君の場合、歴史を動かす力は何なのか。

森 前に一寸ふれたが「国語の歴史は成立するか、これには、人間が作ったものだから歴史は成立している筈だ」と考える。自明のこととして扱つてよい」(二〇頁一三行)「いいながな「変化は歴史でない」(同頁十七行)「通時的な歴史とは別の範疇に属する」(同頁一八行)「何故にこの様な変化がおこつたか」と問うことによつて史になるか」と必すしもそうはならない」(二二頁一行)「言語の変化の原因を社会的な變動におく考へ方がある。それは問題を言語外の領域に移行させるものである」(同頁七行)という様な言葉に出逢うと戸迷いをする。最初に自明の事としてゐる場合の歴史は、存在としての歴史、後に疑いを投げている歴史は、學としての歴史と考へれば理會もつくが、しかし「変化は歴史ではない」以下の言葉にはその注釈が必要であらう。後に時枝博士の説に關係して「歴史は新しい素材のうちに、意味をたずねる、さういふことのうちにある」(一五頁九行)といふ、また永積氏の論文に關係して「国語史も現代の歴史でなければならぬ」(同頁一五行)と論じてゐる。しかし歴史に對する奥村君の積極的な意見は結局述べられておらず、却つて逆説的な、方で歴史把握を困難にしている感がある。否定的な言葉よりも建設的な意見を聞きたい。また術語には深い意味があつて單純に取扱へぬものであるのに、この論ではそれが可なり簡單に取扱われてゐるような氣がする。「評價が學問的な叙述にならない」(二四頁二行)とあるが、私は評價と學問的叙述とが全然、區別されるものとは考へておらぬ。勿論、價值と認識との關係については諸説があつて難しいが、私は両者の間に密接な關係を認めたい。「一種の評價」は學問の出發をなし、同時に「學問的評價」という言葉もあるように両者は全然別個のものではない。

田中 一般に學的認識と評價とを區別することは私は正しいと思ふし、この文章もさういふ意味で理會してゐる。しかし、具体的に見ると「行き過ぎ」「淫し過ぎ」(十四頁二行)「さういふ言葉は評價を意味するとして、非難されてゐるわけであるが、それらと奥村君のいわゆる「内的成熟」(十三頁十五行)なまといふ言葉とはどれ



だけちがうのか。認識と評價とを区別するのはよいが、その区別がなおあいまいにしか扱えられていないのではないかと思う。

源 精神という言葉はこの論文の前後で異つていように思う。

田中 中島・中村氏らの説に對する批判（一四頁九行）について、私はそれらの文章を見ていないのではつきりとは言えないが、我田引水の感がある。雜誌論文はさうしても立論の目的を限定せざるをえないので、直接必要のないことはいちいち論証しないのが普通である。そういう論文の視点を考慮しないで、むやみに自分の視点にひき入れて文章をあげつらうことは無意味であつたり誤解になる、ということが起るだろう。

森 私はむしろそこに引用されてある中島・中村兩氏の言葉が、それだけでも却つてよく納得される。

明石 結局文學史と言語史との關係ははつきりされなかつた。題と内容とが合わないと思う。

阪倉 最後の「言語史というもの、機能」（一六頁一行）とはどういう意味か。

森 機能が言語のはたらきという意味ならば、それがどのようなはたらきなのかを明らかにする必要がある。他説の批判に終つてその点が不明瞭である。今後に期待しよう。

### 時代区分の名稱について 田中 裕

十月二日、一三、三〇—一七〇〇、樂友會館。

出席者—宗政、大濱、森、源、田中、終、阪倉、

明石、井手、神澤

森 この論文は第一号のうちで一番読みごたえがあつた。そして大いに啓發された。時代区分については興味をもつてゐるが、その名稱が一應學問史的に整理系統づけられた事は結構と思う。この論文を出發点として更に考察をつみ重ね、一そう完全なものにしてほしい。そのような意味で尙しりたいと思う所、今後更に補うてほしいと思う所をいう。

(1)、上古、中古、近古、近世などに對して中世という語が一番遅れて用いられた事情は非常に明瞭になつた。恐らく中世という言葉は世界的觀點から新しく用いられた



ものかと思う。しかし上古、中古、近古という従来の考  
え方のなかには、既に「中」という言葉が用いられてい  
る。勿論これは古代のうちでの「中」という考えに止ま  
るにしても、その限りにおいては「かみ、なか、しも」  
という三区分をなしている。その場合の「中」は中世の  
「中」とは全然無関係のものかごうか。勿論中世は全体  
的な時代区分の立場に本づき、中古というのは單なる古  
代に對する色分けにとどまるものかもしれぬ。そのよう  
な意味でこの關係を調べる事は困難かもしれぬ。しかし  
從來の時代区分の考え方と新しい時代区分の關係とがこ  
れによつて、もし明らかになれば非常に面白いと思う。

尙古体、中古体、近体という時代区分が伴蒿溪の『国  
つ文世々の跡』にみえ、又新井白石の『讀史餘論』には當  
代に對して、上古、中世という區別が考えられている。

『讀史餘論』の時代区分は細かいが『国つ文世々の跡』  
は三区分にまよつてゐる。明治以降の時代区分はむし  
ろ国學者の考え方なごから導かれたものではないか。

(2)、時代区分の名稱についてはここに論じられたもの  
以外に「近代」という考え方がある。この「近代」とい

う考え方の出るのは何時頃か。これを調べる事は意義が  
あると思うので、ついでに究めておいて貰えば有難い。

(3)、古代、中世、近世という三區分法がルネッサンス期  
にはじまる事はわかつてゐる、それがわが国の學者によつ  
て取り入れられたのは何時頃の事になるか。これは恐ら  
く中世という考え方が行われると共に、自覺されてくる  
ものと思うが、藤岡博士『国文学史講話』には中世という  
言葉が用いられながら、そこに三區分法は採用されてお  
らぬ。三區分法というのは時代区分に對して根本的態度  
を示すもので、それは中世という考え方のない上古、中  
古、近古、近世という区分法即ち古代を重じて近世を添  
えたような考え方、あるいは又時代区分は文学史にこつ  
て單なる便宜上のものにこどまるというような考え方こ  
は根本的に異なるものと思う。そのような意味で三区分  
法が我が国に取り入れられた時期が明らかになれば、時  
代区分に對する考え方をみる上に非常に役立つてくる。  
しかしこれはむしろ史學者に聞かねばわからぬ事柄かも  
しれぬ。阪口昂『概觀世界史潮』序文には三區分法の根本  
的意義が説かれているが、あるいは阪口さんや原勝郎さ



んなぎの時代の人達を調べて行けばわかるかもしれぬ。

以上三つがこの論文について更にしりたい所であつたが、次に君の考え方に対する僕の異見をいう。

(1)、時代区分の考え方については「史学的立場と世界史的立場」(二二頁一二行)という二つの立場を認めてゐる。このように二つに分ける事自体はよいが、その名稱がこれではどちらとも史学の立場となつて、相違点があいまいになる。その相違点をもう少し明瞭にするような言い方が望ましい。僕としては中世という言葉や三区分法が確立されてくるのは比較方法による事で、「世界史的立場」とよんでよいが、それに対して上古、中古、近古、近世なごという区分法は更に以前から我が國にあつたという意味で、これを「日本史的立場」とよんだらさうかと思う。しかし尙落ちつかぬので、もつとその点を明らかにするような言い方を搜しておいて貰えばよい。

(2)、時代区分の世界史的立場について比較考察に対する批判があるが(二四頁から二五頁)、それによる「日本とヨーロッパ文学との間の交流、影響関係はほとんど見出し難」(二四頁一四行)いさう理由によつてその考

え方は否定されている。しかし比較文学はそのような直接比較の場合だけに成り立つものと限らず、もつと広く間接比較の場合も考慮に容れる事が必要ではないかと思う。むしろ日本のようにヨーロッパとは直接関係のなかつた國に却つて共通問題がみられれば、これこそ文学共通の根本問題として有益なのではないか。日本における比較文学のあり方として間接比較の方法こそ重要な意味があると思う。時代区分についても殊にその点を考慮に容れる事によつて正確な判断が下せるのではないか。

(3)、時代区分については史学的区分と文学史的区分との関係を考え「あくまで文学史区分が先行してその逆でないことが重要」(二五頁一二頁)といひ、又「文学史区分を決定するものは文学史的事象の考察である」(二六頁五行)と文学史区分に重点をおいて説いている。一般論としてそれに違ひはないが、しかし具体的にはさうすればよい。例えば史学的区分と文学史的区分が一致する場合と一致せぬ場合について、もし一致すればその聯關が明らかになり、文学史の理解に便宜を加える(二五頁九行)とあるが、それ以上の具体的な論及がなく、もし一致



せねばどうなるのであろうか、という点も不安になる。その場合に史学的區分と文学史的區分とは單なる別個のものでなく、又その關係も一般と特殊というような場所的關係でもない。もし形式的に「文学史のもつ独自の自律性」をのみ強調すれば却つて文学史を孤立させる恐れがある。僕は文学史的區分と史学的區分とは全体の人間社会のなかの具体的な區別として考えて行きたい。その場合に唯物史觀が全体的立場を最もよく表明していると思う。その下部構造と上部構造との關係は常識になつてゐるが、それに關して下部構造（經濟）に對する上部構造（法律、政治）と共に社会的意識形態（藝術、哲學、宗教）を一應區別してみよう。その場合に史学的立場は具体的には經濟史及び政治史となり、それが文學（藝術）（哲學）（宗教）史と共に全体的な社会史を形づくる事になる。そのような全体的な社会史のなかで具体的に經濟史、政治史、文學史の時代區分について、その一致及び相違を考へるべきものと思う。そこにはじめて文學史の時代區分が經濟史、政治史との關係から全体的な社会史のなかで意味をもつてくる。そのような全体的意味に生かされる事

によつて、文學史独自の時代區分を考へる事が可能になるものといえる。時代區分についてはいずれ私の考えを述べてみたい。

神澤 時代區分に「第一期・第二期等の名稱を用いる方が簡明」（一八頁一二行）とあるが、しかしむしろ時代區分としては形式論であつて、文學史を發展的にみようとする場合に矛盾が生じる。

田中 それは時代區分を整理する場合の前提として、立場を捉われぬようにする爲に便宜上名づけたが、しかし第一期・第二期という名稱で呼んでもよいと思う。

源 古代、中世、近世などと最初から概念規定をせず、純粹に順序づける前提として第一期・第二期・第三期とするなら差支えないと思う。

森 勿論その限りでは差支えない。しかし一方で第一期・第二期という名稱で呼んでもよいという事になることが都合が悪い。文學史の出發点は現代文學であり、その現代文學と異なるものとして古代文學があり、古代文學が近代化する中間に中世文學が存在するという風にあく迄（近代）現代文學との對比において文學史は考へられねば



ならぬ。そこに時代区分の根本問題があると思う、それを第一期、第二期という風にすると現代文學との對比が明瞭でないのみならず、文學史の出発点は古代文學にあるような誤解をも生ずる恐れがある。それはあくまで前提すべきであろう。

大濱 文學史はやはり現代文學から出發すべきで、現在の庶民性という事から各時代の文學史をまとめてみたいと考えている。

明石 ジャンルの確立には時代的にずれがあつても、發生の基盤を考えると共通のものがある。時代區文はそのような共通性格から考えて行かねばならぬと思う。例えば和歌というジャンルのなかで「古今集、千載集又は新古今集、或は新勅撰集の成立期」というものがそれぞれ時代的な意味をもつ「(二五頁一四行)」にしても、それのみによつて時代區分を考えるべきでない。これはむしろ共通した時代のなかでの細かい區別を考えられ、その点中並に詳し過ぎる所があつて、專攻者の匂いがきつい。

## 文學史研究につて

森 修

七月十日、一三、三〇—一九、〇〇、進々堂。

出席者 明石、小久保、終、宗政、森、犬塚、

復、田中、源、阪倉。尙この時、「美意識發展の

歴史と文學史」の一部批評を行う。

田中 この論文は、われわれ「文學史研究会」の意図・方針・課題・運営方法を明らかにするために書かれたもので、お互いに確認し合い、また批判し合いたいと思う。私としてはそれらに関して全く同感である。むしろ疑問は、始めに歴史意識、歴史叙述についてふれている部分(二九頁一行まで)にある。これは森君も序説的に手短かに要約しようとしたせいだろうが、誤解を起しそうな言葉や、性急に問題を割切りすぎる所があるように思う。論文の本旨からいえば周辺のなせん、くにはなるが、実をいうと稿を改めて書いてもらいたいような内容を含んでいる部分なので、それらの点を始めに質しておきたい。まず、歴史の動搖時代を前後に二分して、前者を歴史的反省の時期、後者を啓蒙的創造の時期と區別するのも形式的ではないかと思うが、それからんで「史的関心」に「新しい創造を生もうとする意慾」がむしろ對立的に



考えられていると見える（二七頁一一、一二行）のには一層疑問を感じる。しかしそれはとも角、この論文では更に叙述を進めて、日本の現状を「動搖の前期に屬する（二八頁二三行）と判定するので、その結果「史的關心」こそわれわれに要請されるものとなり、「勿論日本に新しい運動の必要なことはいうまでもない。しかし（中略）その新しい運動はすなわち新しい史的關心をうながす、ことからはじめられねばならぬ」（二八頁一六行以下。傍点田中）と結論されてくる。これは前の時期區分や對立的な考え方からすれば當然の歸結であるが、しかしこういう「史的關心」、つまり新しい創造の意慾と必然的に結びつかない、乃至はそれに裏付けられない單なる史的關心が現在の歴史意識でなければならぬというこの結論には満足できるだろうか。理論というより前にむしろ事實としてわれわれの懷く歴史意識にはそういう説明では足りないものがあるように思う。さすれば、第一、現代日本を動搖の前期とみる判定に誤りがあるのかもしれないし、第二に、そういう現状からわれわれの歴史意識も（嘗ての時代そうであつたように）、必然的にそうい

うもの（史的關心）として規定されねばならないという機械的な決定論に誤りがあるのかもしれない。あるいは更に、いつの時代においても眞に歴史關心、意識を名付けられるものは未來への創造の意慾と對立的に、切り離しては理會されないものではないのか、等の諸点がいろいろ反省されてくるように思う。勿論「むしろ事實として」私の言つたこういう不滿こそ、まさに、森君の警告している「混乱」（二八頁十六行）の証なのかもしれないという反省も併せてしてみなければならぬわけである。たしかに森君の「現代日本はむしろ動搖の前期に屬しているものと考えられる。世界はすでに動搖の後期に入ろうとしているにしても、日本の後進性は却つてそこに史的反省の必要を痛感させるのである。それは現代日本が世界の歩みに加わる準備として第一になされねばならぬ事柄であり、それへの準備なくして世界の動きのみに鋭敏になつても、いたずらに混乱を多くする結果となるであらう」（二八頁二三行以下）という言葉は前期、後期という判定の適否は別として、一應よく分ると思う。西歐に對する日本の現実の段階的な立遅れ、それを一挙にこ



り戻そうとする観念的な焦躁が常に現実の事態を一層混乱させてきたことは確かであるが、しかしその混乱をただすために段階的誤差を認識し直し、それを順序よく追跡するということでは解決できる事態ではないのではなからうか。第一に混乱はすでに現実の質そのものを変えてしまつているので、西欧が後期であるのに對して日本が前期であるという單純な繼起的狀況としては捉えられないものになつてゐるし、第二にはたとえそれが出来るにしても嚴しい世界的現実の強制が、日本にだけそういう緩慢な追跡を許さないとも思われるからである。現在、一般に廣く主張されてゐるような問題意識、すなわち過去の遺産に對する関心や評價は新しい創造への意慾に實踐的に媒介されたものでなくてはならないといふことは決して先走りといへないであらう。ただこういう問題意識を特定の史觀の下でしか理會しないといふのは正しくないといふまでであらうと思う。

森君のいうように前期における歴史的態度としては「史的関心」、「史的反省」といふことがたゞえ考えられるとしても、現代日本の前期的狀況において必要であ

るといわれるそれは、たとえば平安末期に屢々見られるそれとはかなりに違ふものではなからうか。いいかえれば單なる過去への憧憬的関心といった風のものではもはや役立たないことは確かであらう。さすればこういういくつかの前期的な史的関心の間に見られる種々の差異は史的環境の差異によることも大きいであらうが、恐らくはやはり未来への創造の意慾との關係において生じてくる筈だと思う。平安末期のように「史的関心」だけが割合純粹に印象されるような場合でも決して一方の條件を見落すことはできないものである。だから一般にいつて、右の兩者の聯関から遊離した單なる「史的関心」を取上げることは抽象であり、形式論といわねばならないと思う。

榎 愚管抄と古來風体抄とが中世初頭に書かれたと考えられているが、むしろこれらは古代の終末に書かれたもので、古代へのつながりの方が強いと思う。新しい文化はまず古い文化の中から目覺めてくるもので、これらの書物はそのような古い文化の中から新しい反省として生れてきたと考えられる。

阪倉 二傳統のくずれゆくのを待たねばならぬ現代日本」



(二八頁一三行) という言い方はどうか。

宗政 くずれるのを待つ必要はない筈である。

阪倉 否定される時代というものは、そういう無關心な時代ではないし、否定することこそ何よりも強い關心をもつていうことでなければならぬ。

明石 そのためにはやはり歴史が現代から出發するということを考えねばならぬ。その点が弱いと思う。

田中 「文献學がすでに時代的役割をはたし」とか「それらは從來通り文献學の權威者に任せ」(三〇頁三、四行) というのはどうだろうか。森君の意圖はよく分るし文献學は文學史研究の婢であるという氣魄はいくらもつても持ちすぎることはないと思うが、しかしそれだから却つて、このように兩者を單に對立的に捉えない方がよい。文學史研究を独自のやり方で、促進すればする程それに必要な文献は新たに自からの手で搜索し開拓しなければならぬという關係があらわれるわけで、むしろその点を指摘する方が文献學批判としては有意義ではなからうか。後のところでは森君も「文學研究のために文學的方法をいかに生かすか」ということを考えねばならぬ

い」(三二頁二行)と書いているが、上の意味でいへばこの言い方もまだ消極的だと思ふ。

阪倉 「文献學がその役割をはたしてきたのは明治大正の時期」(三〇頁八行) というのはもう少し延ばされないか。そうすれば國語學との關係が都合よく考えられるが森 明治大正昭和初期(十年頃まで)といった方が適切である。

明石 三一頁一三行の「文献學の十分な成長を待つこともなく」とあるのは、十分な批判、ミ言うべきであろう。宗政 森さんは弁証法的に考えていられるらしいが、そこここに形而上學的な言い方が見える。弁証法が觀念的だからと思ふ。

源 共同研究の方法、古典の標準などのこと(三三頁三行以下)は今後のあり方として十分考えていきたい。

森 今日の批判は、いずれも有難かつた。ただ序説の批判が多く、肝腎の部分についての批判が殆んど出ななだことは物足らぬ。その点は追々に聞かせてほしい。しかしこれは何よりも実践の問題になると思ふ。